

大里

御鉄砲と大里迷路

散策絵地図

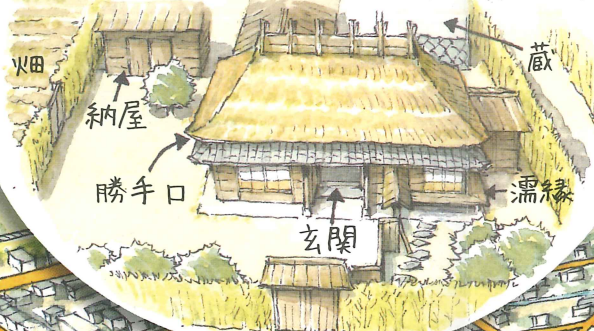
「四方原開拓文碑」
四方原一帯は寛永14年
から20年を費やし野村
惣太夫らによって
開拓されました。

「JR阿波
海南駅」

「長屋門」をもつ
屋敷敷地内には、町指定
天然記念物の「タブノキ」が
あります。



「御鉄砲屋敷」想像図
現在の主屋は明治初期に建てられた
ものですが、御鉄砲当時は「かやぶき茅葺」
だったと思われます。土を迎えるため「玄関
構え」であり側面に勝手口があるのも特徴です。



藩からの扶持米と
仕事(役)による御役料
だけでは食べていけない
ので、敷地内を畑に
して自給自足をして
いたといひます。

阿波海南文化村
「海陽町立博物館」には「大里
古墳」や「大里古銭」などの関係資料を
はじめ、南北朝時代に海部川流域で発生
した阿波の名刀「海部刀」が46点展示されて
います。



新刀期に多い片切刃造りの脇指
は「海部包丁」とよばれて
います。

「和奈佐意富曾神社」
郡内唯一といわれる
「式内社」です。

「中宮神社(合祀)」

「大里八幡神社」
秋祭りは県下一勇壮な祭り
といわれ、関船やダンジリが
見事です。



昔の善蔵川
明治期には、大里村だけで30艘の耕作舟
があり、善蔵川の水運を利用していた
ため、多くの舟着き場がありました。
日常の洗い場としても
利用。



「大里橋」

史跡
「大里古銭」出土地
の碑があります。

大里古墳(大里2号墳)



6世紀末から7世紀初め頃に造られた
もので、直径約20m、高さ4~5mの円墳
です。10m以上の「横穴式石室」をもつ
貴重なもので、県指定の
史跡第1号です。

この場所は、藩政
時代後期より、下級武士
の子弟のための「郷学校」
が設置されていました。

一宮神社

鉄砲の名人
「来條義盛」の墓碑
があります。

見事な洋風木造
建築(擬洋風)です。



御鉄砲の
「射場」跡

寒竹はたたいて
繊維を採り、火縄の材料
にもなりました。
火縄→



「御鉄砲」が敷地の垣や
小路(路地)に「寒竹」を植えたことで
形成された「大里迷路」はこの町の最大の景観要素
です。寒竹は3mほどにもなるので、密生すると全く見通しが
利かなかったといひます。



「朝迷い込んできたお通路さんが、昼にまた同じ所に
回ってきた」という話が残っているほどです。

大里は、海部川河口北岸に位置する町です。「大里海岸」に程近い
砂地状の台地からは「大里古墳群」が発見され、その規模から
6世紀末には、海部川下流域を支配する大きな勢力をもった豪族
が存在していたと考えられています。また同地域からは、南北朝
時代頃とみられる大量の埋蔵銭(渡来銭など)7万枚余りが発見
されていることから、古来より大里の人々が、発達した航海術を
駆使し広く交易をおこなっていたことがうかがえます。
近世に入ると、海部川河口南岸に「鞆城(海部城)」が築かれ、
藩政時代初期には、阿土国境の警備のために「御鉄砲」と
呼ばれる下級藩士(84戸)や「判形人」と呼ばれる橋泊の水軍
(27戸)が「浜崎」一帯に配置されました。「御鉄砲」たちの
屋敷は広い敷地を有し、その周囲と路地にはおのおの「寒竹」
が垣として植えられていたために、同じような竹垣が両側に連なる、
複雑で見通しの利かない「迷路」のような屋敷町が形成された
といひます。これは、敵が攻めてきたときには竹垣による「見通し
の悪さ」を利用して身を守る一方で、味方勢は「槍」や「火縄銃」
を竹垣に差し込み撃つことができ、垣を押し広げると、どこから
でも自在に屋敷内に入ることができるという利点も兼ね備えて
いました。明治以降になると、刈り込みの手間がかかる竹垣に
代わり「榎(イヌマキ)」が植えられるようになりましたが、今なお
残る生垣の連なる小路(路地)からは、希有な歴史を歩んできた
屋敷町としての風情を感じるすることができます。